

雲南懇話会 2015. 12. 19

遊牧・移牧・定牧

モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから

参考文献：

『続生老病死のエコロジー—ヒマラヤとアンデスに生きる身体・
こころ・時間』2013、昭和堂（奥宮清人との共編著）

『遊牧・移牧・定牧：モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフ
ィールドから』 2014、ナカニシヤ出版

『都市と草原—変わりゆくモンゴル』 2015、風媒社（石井祥子、
鈴木康弘との共編著）

放送大学 稲村哲也

モンゴルの遊牧社会



Summer camping site

トナカイ遊牧：
モンゴル最北部



季節移動 (夏營地→秋營地)



モンゴル草原の遊牧

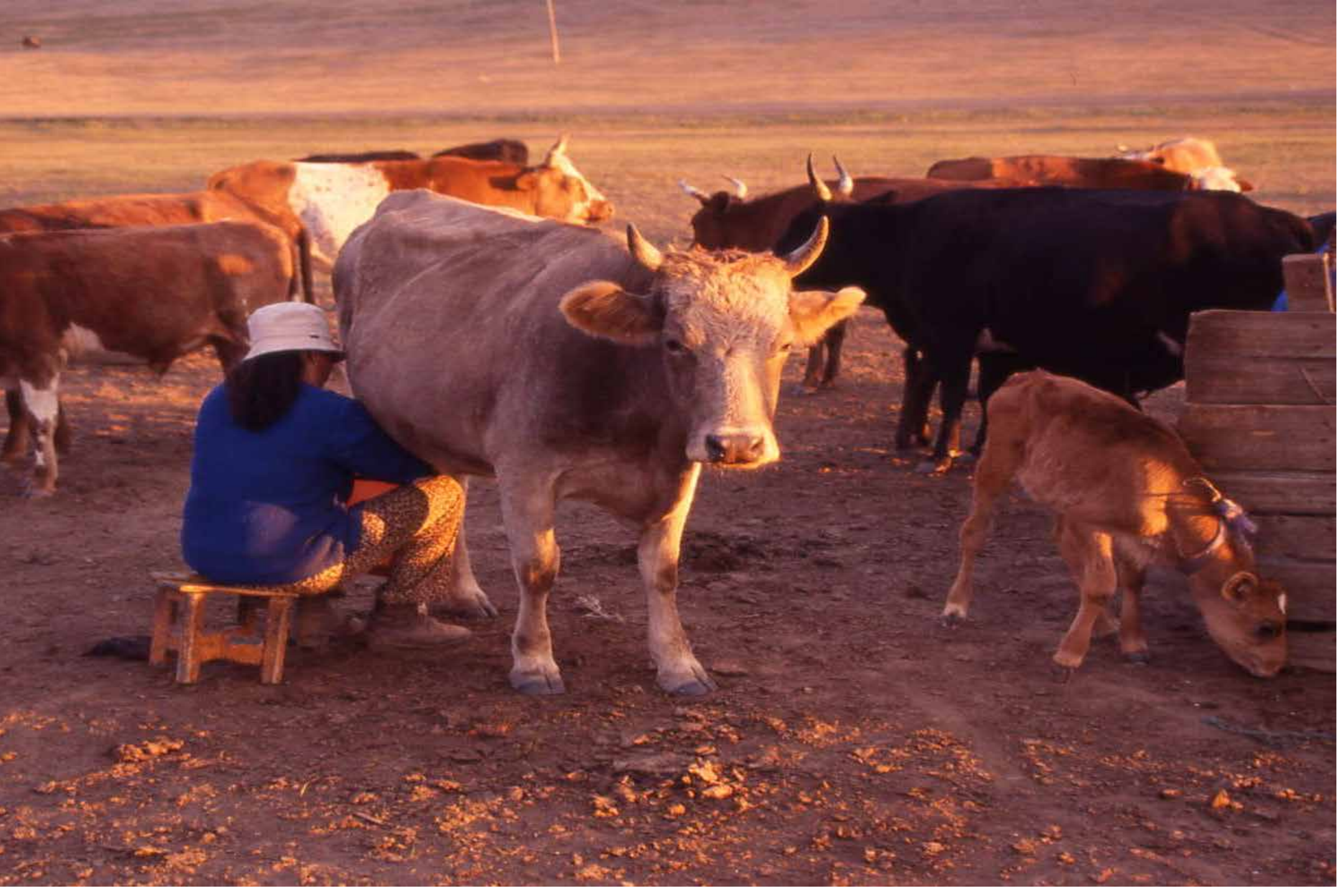




タワン・マル (5種類の家畜)











春先のゴビで



モンゴルの社会主義・牧畜集団化と市場経済化

■牧畜の集団化 1950年代後半からネグデル（農牧業組合）

家畜を集団所有とし、牧民は家畜飼養を請け負い給料

家畜飼養の分業化

ネグデル本部として定住区を設ける

ソ連の援助で共同農場を開発

■ネグデル（農牧業組合）の解体

1989年に民主化運動

1990年代：「民営化証券」を国民に配布し私有化を推進

ネグデルの家畜が私有化される

モンゴル伝統におけるSustainabilityとResilience

Sustainability (持続性)

- 
- ・五畜を飼う：多様な植生を利用し、環境への負荷を軽減
 - ・季節移動とゲル：草地のローテーション、気候条件に合わせた柔軟な対応
 - ・離合集散：柔軟な社会関係
- (社会主義の牧畜集団化により中断したが、民主化後に復活)

Resilience (環境激変への復元力)

ゾド (雪害・冷害)、地震等の災害 (環境の激変) に柔軟な対応

急激な都市化・近代化



Sustainability と Resilience

- ・ Sustainability: 「持続性」 環境への文化的適応と、環境変動への緩やかで柔軟な対応力
- ・ Resilience: 「環境激変への復元力」 自然災害など激烈な変動への柔軟な対応力

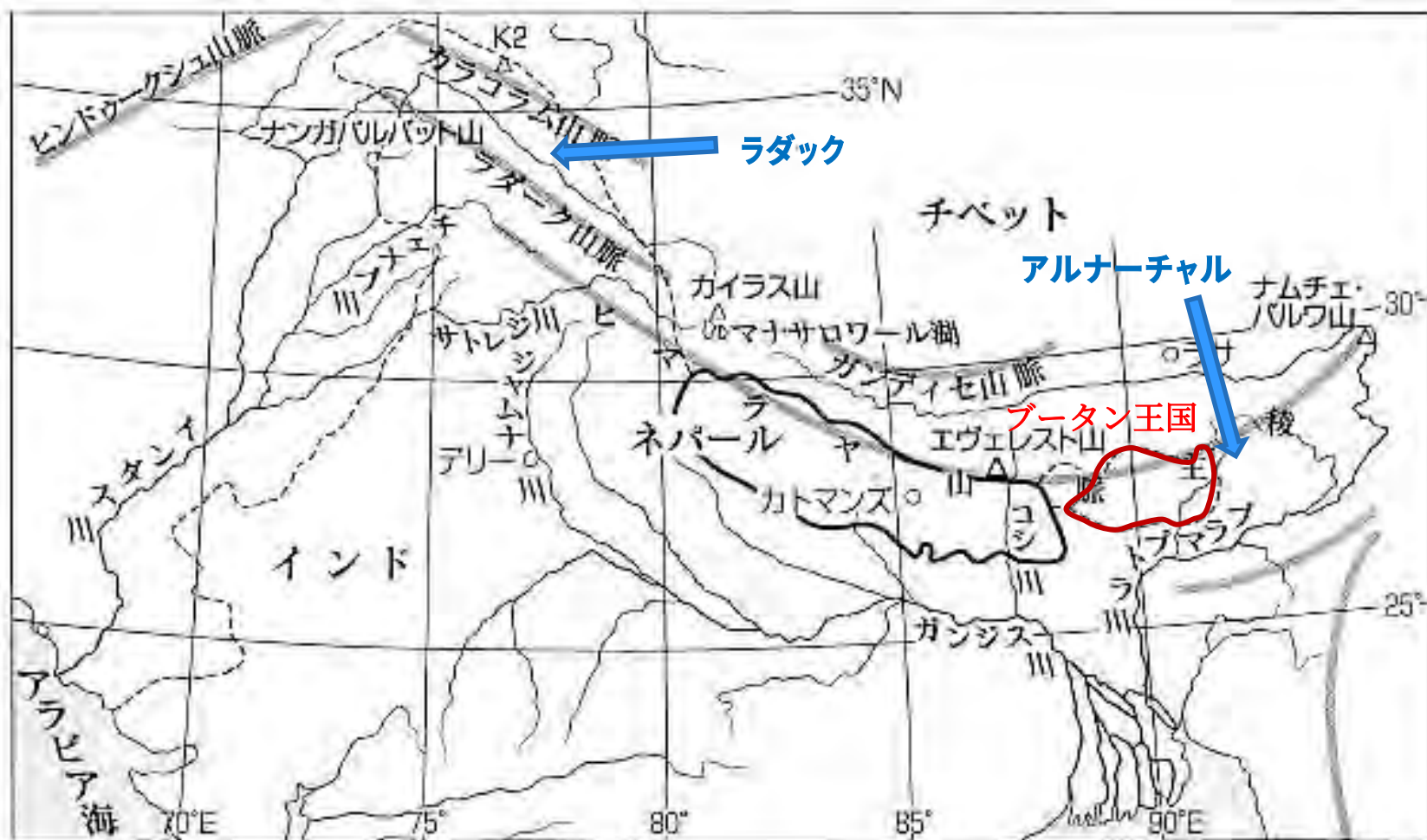
この両者が地域の「伝統文化」のなかに埋め込まれている知恵: Local Knowledgeの重要な部分をなす



近代化のなかでの Resilience構築にとって、「伝統文化」、あるいはLocal Knowledgeを活かすことが重要

●文理融合研究の重要性

多様なヒマラヤ地域

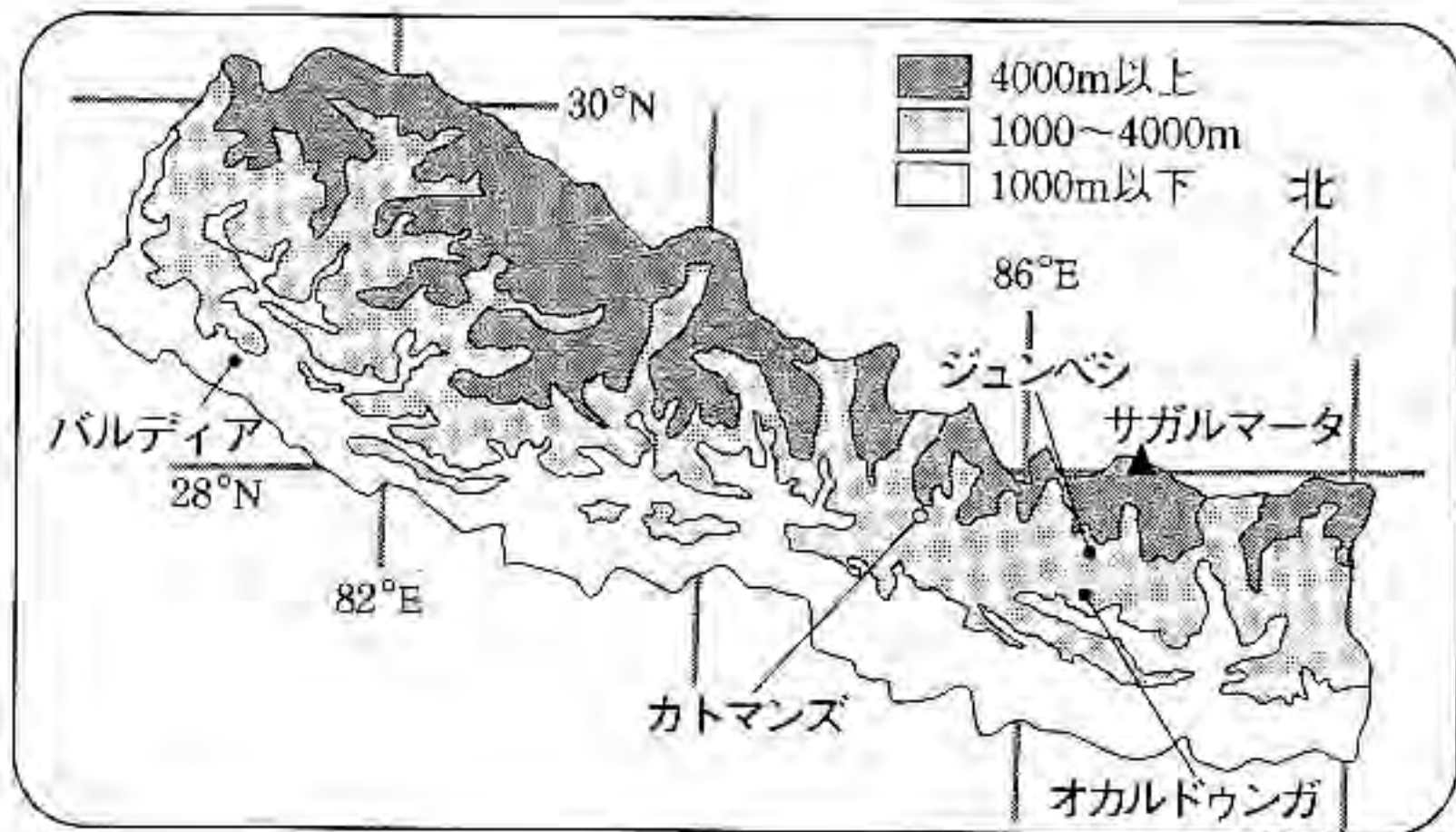


ヒマラヤの断面図

ヒマラヤからチベットにかけての地形と地下構造の関係を示すブロックダイヤグラム。(岩田修二作成、山本・稲村編著2000『ヒマラヤの環境誌』より)



ネパール



0 10 20km

ヌンプール峰
6957m

中間山地帯

ツォタン

チャルンカ

高山草原

ジャンダルダプ

バサ

ジュンベシ

モミ帯

ファフル

カシ、ゴヨウマツ帯

オカルドウンガ

カシ帯

マハバーラト山脈

シイ帯

シワリーク丘陵

ヒメツバキ、マツ帯

ルムジェタール

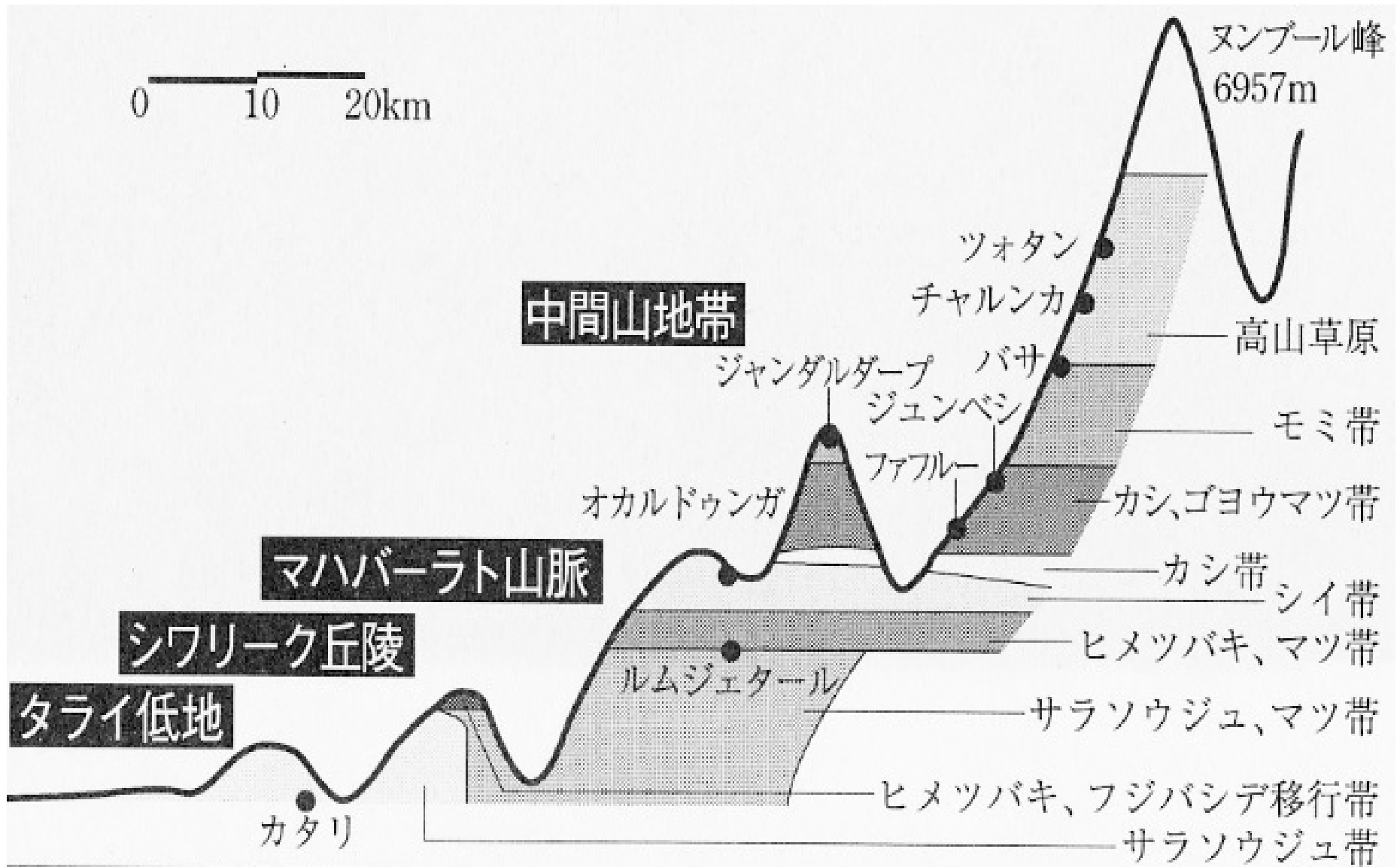
サラソウジュ、マツ帯

タライ低地

カタリ

ヒメツバキ、フジバシデ移行帯

サラソウジュ帯



タイ (熱帯低地)



タイ (熱帯低地) マイティリ族の村



タイ (熱帯低地) マイティリ族の村



中間山地帯 (ミッドランド)

ネワール族の旧王都 バクタプール





ネパール地震

ヒन्दウー教寺院 パシュパティナート 正面







カトマンズ盆地 (中間山地帯、ミッドランド)









ネワールの村



ネワール族の村



(2) ヒマラヤ高地



東ネパール、ソル地方のシェ ルパ族



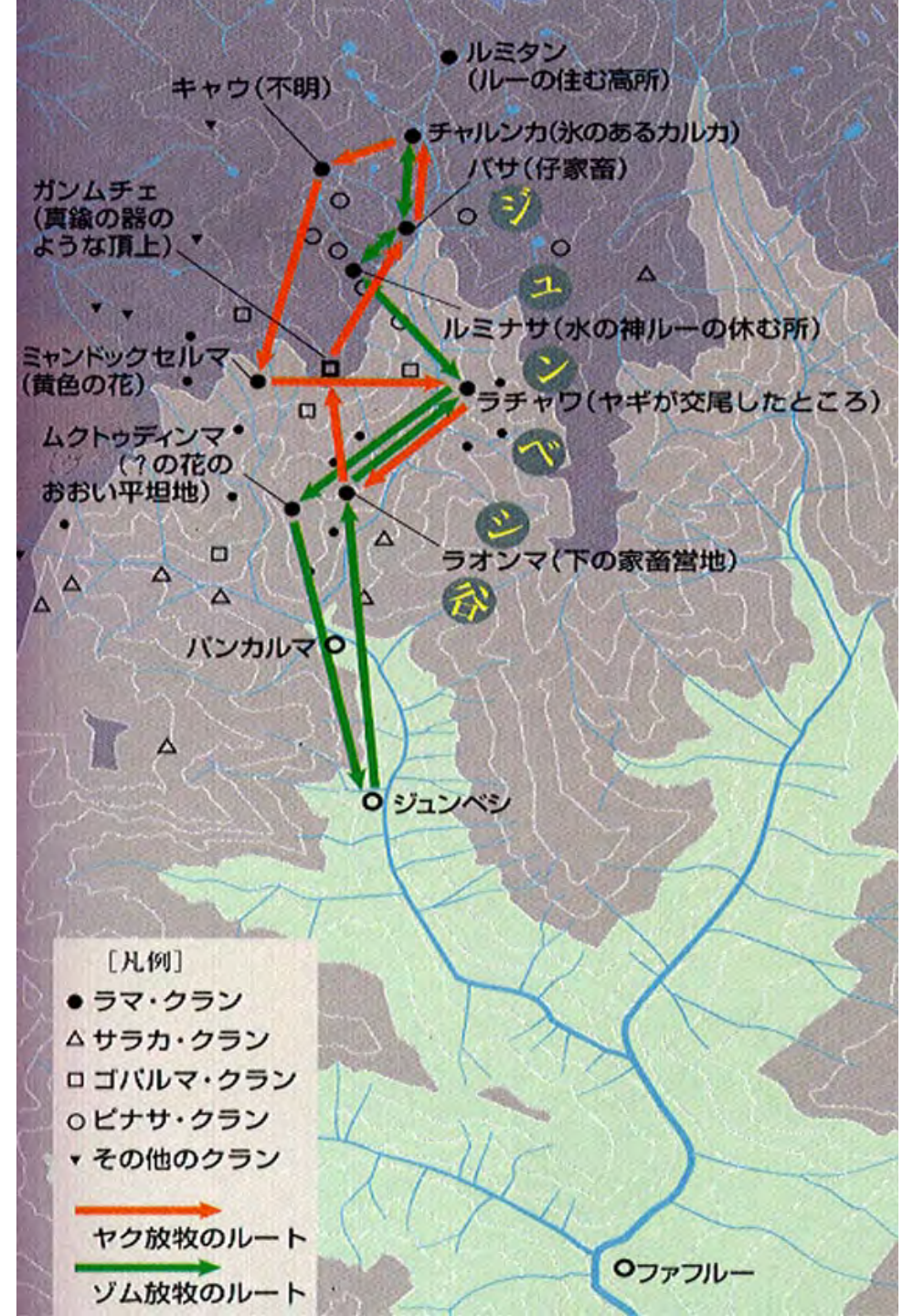
Sherpa village





シェルパの農業

ヤク及びゾムの移牧 (トランスヒューマンス)



Pastureland in the summer



季節移動：夏から秋へ





タキシンド寺院



仙塔建設



下塗り



曼荼羅制作



仮面舞踊マニ・リムドゥ



ネパール・ヒマラヤの狩猟民ラウテ



ラウテ





ラウテのキャンプ(ラウティ)







ラウテの生業活動(木工)



ラウテの生業活動(木工)





内戦の影響

- 1996年後の共産主義毛沢東派 (マオイスト) : 多言語、多宗教を認めること、王制廃止、カースト廃止、経済的平等、男女平等、民族マイノリティー・先住民の自治のための連邦制などを訴えゲリラ運動を始めた。
 - *多くの先住民族や低カーストや女性の若者がゲリラに参加。
 - *マオイストが合法化され、憲法制定議会の選挙を行い第1党となる。王制の廃止で議会の全政党が一致。
 - *マオイストが民族別の連邦を作ることを訴えた。しかし、区分するのは困難で、連邦制の実現は困難。

2015年、ようやく憲法成立

ラウテにも大きな影響:

貨幣経済が限定的であった→援助の対象となり、個人に現金が入るようになり、互報酬、再分配経済が弱体化

2 インド・ヒマラヤ ーインド北部、ラダーク地方ー





















多様なヒマラヤ世界
ーラダーク地方ー
チャンタン高原 (4800m)
ヤクの遊牧



チャンタンの夏放牧地(4800m)



遊牧(ヤクの季節移動)



チャンタンの牧民のテント



テント・サイト(寒さの対策)



荷を運ぶ羊：昔は塩の交易のため、チベットや他の地方に羊のキャラバンを行った。チベットとの国境紛争(1959～)のために交易はできなくなった。



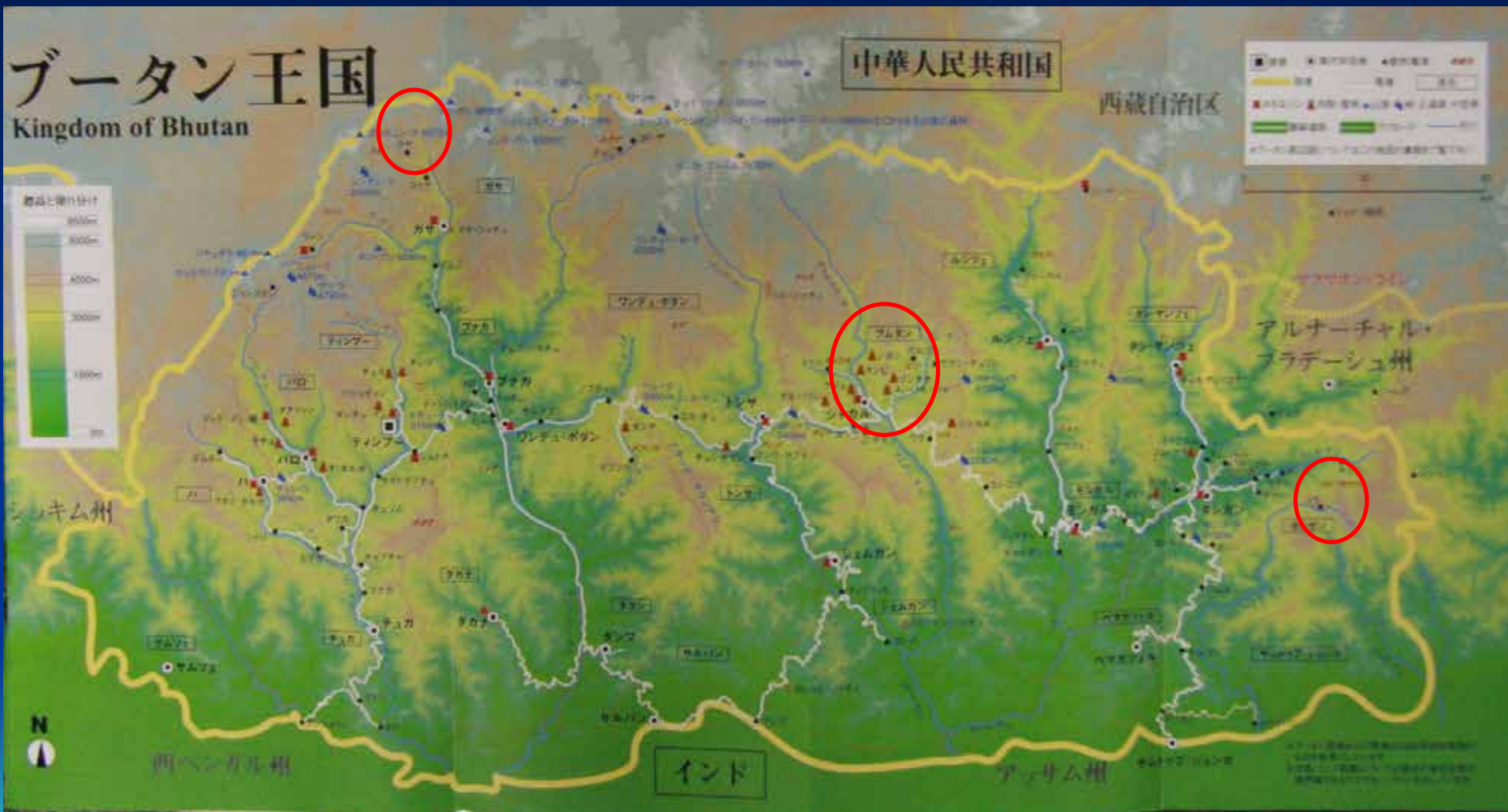
チャンタンの冬村(4600m)



多様なヒマラヤ世界 「幸福王国」ブータン



ブータン王国
Kingdom of Bhutan



ブータン・ヒマラヤ



ブータン略史

- 17世紀：チベットの高僧ガワン・ナムゲルが、割拠する群雄を征服、実権を掌握。
- 1907年：東部トンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが台頭し、初代の国王に就任
- 1972年：第4代国王は16歳で即位。第4代国王の下で、国の近代化と民主化に向けた取組が行われてきた。GNH (Gross National Happiness) 政策を掲げる。
- 2006年12月：現国王（第5代目）に、王位継承
- 2011年10月：現国王が結婚。

首都ティンブー



トンサのゾン(城・寺院):初代国王の出身地



中部の町トンサの市場



ブムタン地方の村ドウル



ブムタン地方の村ドウル



ドゥル村の学校



村のこどもたち



ドゥル村の家



家の内部(仏壇 3階)



家の中(3階): 国王の写真



家の内部(2階)



夫婦(母系出自 婿入り婚)



ディモ(ヤクの雌)



笹を集める(ヤクの餌)



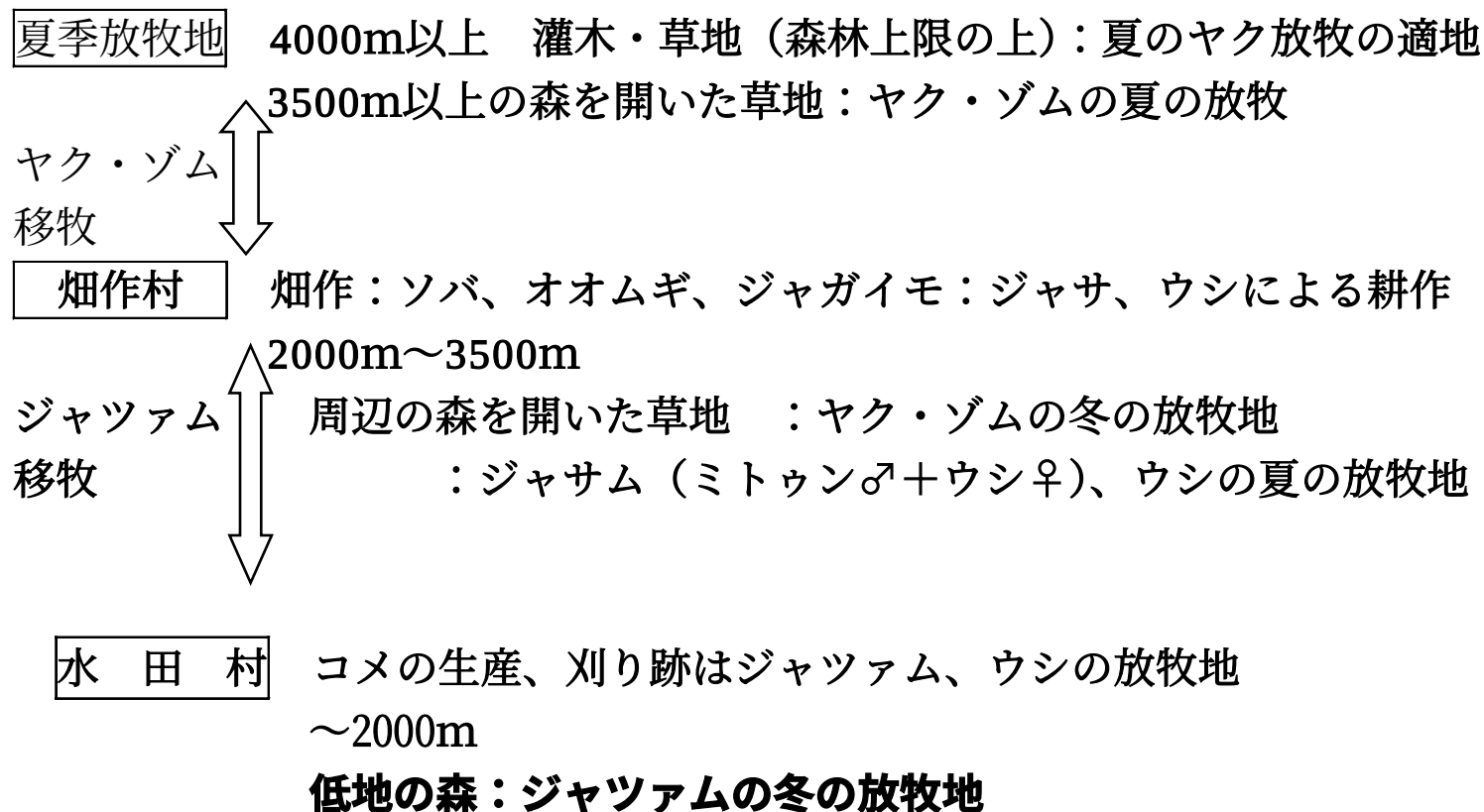
低地で放牧されるジャサム (ウシ♀+ミタン♂)



ミタン(インド東北部の熱帯で家畜化された)



ブータンにおける移牧モデル





パロのゾン(行政府:城・寺院)

パロのゾンの寺院(ツェチュ祭)



パロのゾンの祭り





祭り：家族・コミュニティ・世代間の交流と絆を
培い、生活に区切りをつけ、活力の源となる
非日常の時空間——心がうきうきと楽しい

GNH(国民総幸福量)の発想

「GNP(国民総生産)よりGNH(国民総幸福量)」

第4代国王 ジグメ・シンゲ・ワンチュック (1955年生まれ、ロンドンに留学し、1971年に帰国、翌72年に第3第国王死去により、17歳で即位)

1976年 第5回非同盟諸国会議出席後の記者会見(当時21歳)

■GNP批判の潮流

サイモン・S・グズネッツ GNPを草案(1930年代)、しかし意図に反し、福祉や豊かさの尺度であるかのように一人歩き。「GNPでは国の豊かさを推し量ることはできない」と米議会で証言(1943年)。

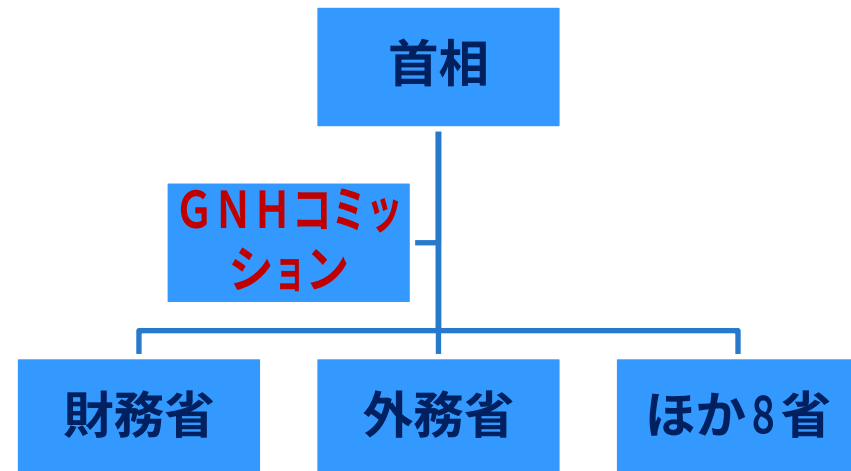
ヘイゼル・アンダーソン「GNPは市場を経由する財とサービスをすべて加算的に経常。もし、製鉄所が湖を汚染し、その浄化に費用が発生すると、加算される」『脱工業化社会の到来』(1973)

ダニエル・ベル「GNPは、マイナスをもたらす社会費用も生産や富にプラスの貢献をするものとして加算」『エントロピーの経済学』(邦訳、1983)

GNHの4本柱

- 公正で公平な社会経済の発達
- 文化的、精神的な遺産の保存、促進
- 環境保護
- 良き統治

1998年ティンレイ首相演説「GNHの価値観と開発」
UNDP (国連開発計画) アジア太平洋ミレニアム会議



③ 古代アンデスにおける resilience

インカ帝国



1532年にスペイン
征服者フランシス
コ・ピサロによって
征服



インカ帝国崩壊
スペイン植民地に

③ Sustainability アンデス先住民社会から





アンデス環境8区分

Javier Pulgar Vidal

チャラ	0- 700 m
海岸ユンガ	700-2400 m
ケチュア	2400-3500 m
スニ	3500-3800 m
プーナ	3800-5000 m
コルディエラ	above 5000m
(山間ユンガ)	1000-2400 m
ルパルパ	3000-1000 m
オマグア	below 1000m

アンデスの多様な自然環境



高原と峡谷：牧畜と農耕

調査地：ペルー南部、アレキーパ県)

高原：牧畜

標高 4000 m

プイカ村
3700m

峡谷：農耕





アンデス高原(ペルー)で放牧されるアルパカ (標高4500m)

アルパカの毛刈り



アンデスの牧畜の特徴

定住的牧畜
(遊牧、移牧では
ない)

搾乳をしない
(ミルクを食用と
して利用しな
い)



アンデス高原の湿原

- ・熱帯の高地は気温の年較差が少ない。
 - ・乾季と雨季：湿原は乾季にも涸れない。
- ⇒標高4000メートル以上の高原の一定領域内で、年間を通じて家畜の維持が可能



2種類の家畜リャマとアルパカの用途

Llama リャマ

輸送

(肉)

Alpaca アルパカ

毛

(肉)





リャマのキャラバン：農村から農産物を運ぶ





アンデスの階段畑

アンデスで栽培化・家畜化された動植物

穀物・雑穀 トウモロコシ キノア カニワ アマランス

イモ ユカ ジャガイモ サツマイモ オカ オユコ

ラカチャ ヤコン カンナ クズイモ マシュア マカ

その他 インゲンマメ数種 ピーナツ タルウィ

カボチャ トウガラシ コカ タバコ

果実 アボカド トマト チリモヤ ルクマ パカエ

パイナップル その他

家畜 リヤマ アルパカ クイ (テンジクネズミ)

アンデスの作物

作物名	現地名	学名	栽培高度 (m)			
			1000	2000	3000	4000
パイナップル	piña	<i>Ananas comosus</i>				
グアバ	guallava	<i>Psidium guajava</i>				
インゲンマメ	frijol	<i>Phaseolus vulgaris</i>				
パカイ	pácay	<i>Inga</i> sp.				
・サトイモ	uncúcha	<i>Colocasia esculenta</i>				
マニオク	yuca	<i>Manihot esculenta</i>				
・バナナ	plátano	<i>Musa</i> sp.				
アチオテ	achiote	<i>Bixa orellana</i>				
タバコ	tabaco	<i>Nicotiana tabacum</i>				
グラナディーヤ	granadilla	<i>Passiflora</i> sp.				
アボガド	palta	<i>Persea americana</i>				
・サトウキビ	caña	<i>Saccharum officinarum</i>				
トマト	tomate	<i>Lycopersicum esculenrum</i>				
・柑橘類	limón, naranja	<i>Citrus</i> spp.				
アチラ	achira	<i>Canna edulis</i>				
ペピーノ	pepino	<i>Solanum muricatum</i>				
サツマイモ	apichu	<i>Ipomoea batatas</i>				
パパイア	papaya	<i>Carica papaya</i>				
・モモ	durazno	<i>Prunus persica</i>				
カボチャ	zapallo	<i>Cucurbita</i> spp.				
トウモロコシ	sara	<i>Zea mays</i>				
・コーヒー	café	<i>Coffea</i> sp.				
ラカチャ	viráca	<i>Arracacia xanthorryza</i>				
トウガラシ	locoto	<i>Capsicum pubescens</i>				
・タマネギ	cebolla	<i>Allium cepa</i>				
・キャベツ	col	<i>Brassica deracea</i>				
ヤコン	llacón	<i>Polymnia edulis</i>				
カプリ	capli	<i>Prunus capollin</i>				
・ソラマメ	haba	<i>Vicia faba</i>				
タルウイ	taruhui	<i>Lupinus mutabilis</i>				
キヌア	quinua	<i>Chenopodium quinoa</i>				
マシュア	isaño	<i>Tropaeolum tuberosum</i>				
オユコ	olluco	<i>Ullucus tuberosus</i>				
オカ	oca	<i>Oxalis tuberosa</i>				
ジャガイモ	papa	<i>Solanum</i> spp.				

図 5-4 マルカパタの栽培植物とその栽培高度域 (1979 年 1 月～2 月). ・印の作物は旧大陸起源の栽培植物 [山本 1980].

キノア



作物の多様性：トウモロコシの品種



多種類のイモを作物として開発

ジャガイモ

オカ

オユコ





高地の苦いジャガイモ (野生性も維持) → 凍結
乾燥加工: 毒抜きと保存・運搬に便利

アンデスにおける生物生産の多様性

野生 (wild) 動植物～家畜・栽培植物 (domestication)

野生性の維持

苦いジャガイモ：毒をもち、虫がつかない、寒さに強い

ビクーニャ：あえて野生のまま、保全しつつ利用、高品質の維持

「カトリック」の祭り農民・牧民の親密な関係、コミュニティ紐帯



ビクーニャの捕獲「チャク」
インカの伝統の復活
野生動物の合理的利用と保護・保全



6.28.02

現代に蘇った「チャク」

ビクーニャ捕獲



「チャク」 ビクーニャの捕獲と毛刈り



ビクーニャの捕獲

コミュニティの開発

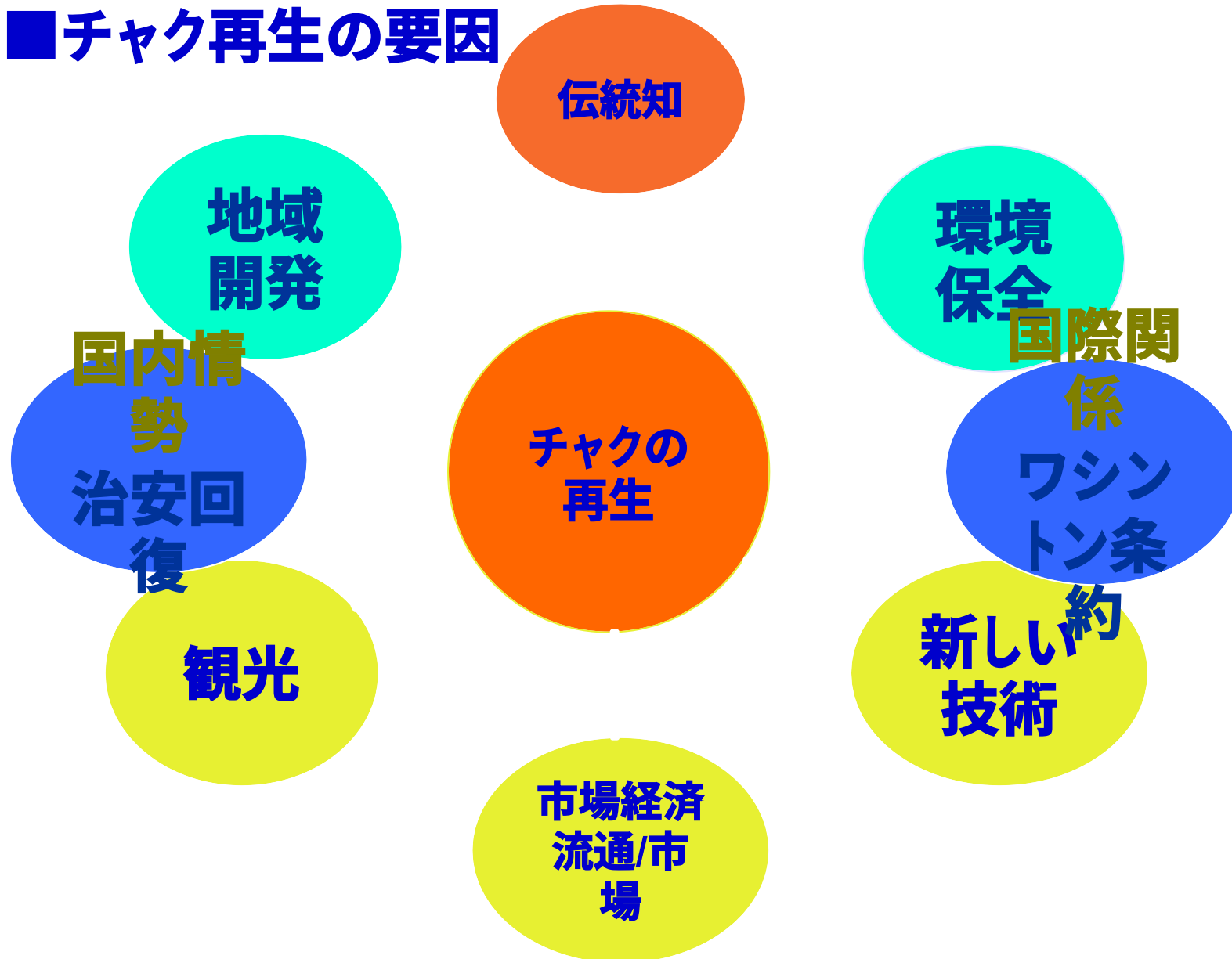


ビクーニャの捕獲

地域の祭り 伝統の再構築



■チャク再生の要因



紀元前3000年の神殿遺跡ラス・シクラス発掘



シクラの出土状況



シクラ (石を包む植物ネット) : 紀元前3000年のものが残っている。



Tipo II Shicra de junco
Scirpus cf. californicus
Técnica anudado
Contiene replica de piedras

インカ文明遺跡 マチュピチュ



**Machu pichu遺跡：
インカの石造建造物は
たいへんresilient**



マチュピチュの太陽神殿



**インカ時代のサクサイワマン遺跡：多角形の石組、
ジグザグ構造、角の石の配置などは地震に強い**

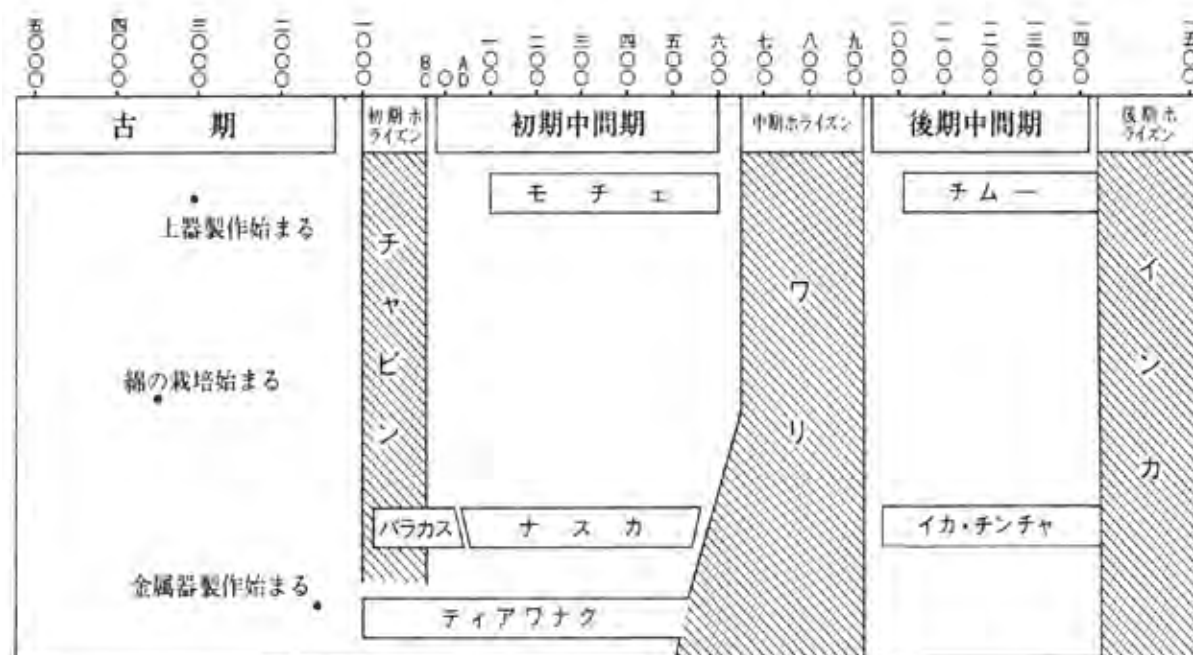


クスコ市





アンデス古代文明の編年





チャビン土器 (紀元前1000年)



インカ土器 (紀元後1500年)

④ペルーの都市 の脆弱性

2007年ペルー地震:ピスコ市のアドベ
(日干しレンガ) 建築がほとんど崩壊



2007年ペルー地震：被災地における軍による救援活動・治安維持・支援物資配布への関与



2007年ペルー地震:被災地における軍による救援・治安維持・支援物資配布への関与



2007年ペルー地震：ピスコ市の教会
の礼拝堂部分が崩落し、100名以上が
死亡



教会から「救助」されるキリスト像





「恥辱の壁」：復興の遅れを隠蔽するため



津波からの復興：小規模の漁業、津波前より倍増

■アンデスにおけるSustainabilityと Resilience

- ・標高差を利用した多様な環境利用
家畜 (リャマ・アルパカ)
多様な栽培植物 多様な品種 (遺伝子レベルの多様性)
「半栽培」
- ・分散型の居住
- ・祭を中心としてコミュニティ紐帯: 相互扶助、「再分配」
- ・古代からの自然災害への対応

■現代ペルーのVulnerability (脆弱性)

一 征服 - 植民地時代からの負の遺産

- ・耐震性の低い建築・都市
- ・スペイン系支配層/先住民系被支配層: 大きな社会格差
- ・コミュニティ紐帯の弱体化: 相互不信、行政府への不信

「伝統社会」から学ぶsustainabilityとresilience (ついでに) happiness

- ①はじめに：中国四川省の大震災：災害と文化社会の係わり
- ②モンゴル遊牧社会のsustainabilityとresilience
- ③古代アンデスのresilience (柔軟性、復元力) &
先住民社会におけるsustainability (持続可能性)
- ④ペルー現代社会のvulnerability (脆弱性)

中国四川省大地震
2008年
(綿竹市被災地)



チャン族自治州の被災地
チャン族の伝統村・ヘイフー村（黒虎寨）



チャン族の家屋：鼎型の炉が家の中心



ほぼ完成したロンブー村の新村（復興に主として広東省が支援）
：近代的な家屋だが、チャン族の生活様式と適合するか懸念



災害と文化：中国での地震災害から

- ・「伝統文化」はしばしばresilientである。
- ・近代化の負の側面：1970年代の急激な発展（建設ブーム）が大災害（被害）の要因（耐震を軽視）
- ・災害支援は政府主導：被災地の地区を省に割当て
- ・土地制度（基本は国有）が復興過程の大きく影響
- ・復興の方法→伝統文化に大きく影響（文化を阻害も）



- ・災害は、被害の規模・特徴、発生から支援・復興過程までを通じて、極めて文化的社会的要素が大きい。
- ・災害⇄社会文化のあり方
- ・文明盛衰から現代社会までの問題である。



「災害人類学」

ご静聴ありがとうございました

放送大学特別講義 (関東 12CH 地方 BS231)



「古代アンデス文明と日本人」1月2日 BS231(放送大学3)
1月30日 (土) 20時

「ヒマラヤ高所に生きる人々の生活と健康
: 高所適応とグローバル化による適応」 1月21日 (木) 20時

参考文献:

『続生老病死のエコロジー—ヒマラヤとアンデスに生きる身体・こころ・時間』2013、昭和堂 (奥宮清人との共編著)

『遊牧・移牧・定牧: モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから』 2014、ナカニシヤ出版

『都市と草原—変わりゆくモンゴル』 2015、風媒社 (石井祥子、鈴木康弘との共編著)